

病害虫発生予察情報（11月予報）

平成29年10月30日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：やや多 (発病株率1.0%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並(+) 降水量：並～多い(+)
	黒斑病・葉枯病	発生量：多 (発病株率1.9%)	10月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：並(+) 降水量：並～多い(+)
	シロイチモジ ヨトウ	発生量：少 (寄生株率0.7%)	10月中旬発生量：少(-) フェロントラップ誘殺数：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率41.7%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	ネギハモグリ バエ	発生量：やや多 (被害株率7.3%)	10月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
キャベツ	黒腐病	発生量：やや多 (発病株率3.6%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+) 台風による傷害の発生(+)
	菌核病	発生量：やや多 (発病株率0.0%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：並～やや多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：並 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 防除員からの情報：やや多(+) フェロントラップ誘殺数：並～やや少(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	オオタバコガ	発生量：少 (寄生株率0.3%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：並～やや少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率1.0%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：並 (発病株率0.5%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(-) 降水量：並～多い(+) 台風による傷害の発生(+)
	白さび病	発生量：やや多 (発病株率3.8%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：少 (発病株率0.9%) アブラムシ類発生量：少 (寄生株率4.5%)	10月中旬発生量 モザイク病：少(発生なし)(-) アブラムシ類：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率0.4%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	ナモグリバエ	発生量：並 (寄生株率18.7%)	10月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
レタス (非結球レタスを 除く)	斑点細菌病	発生量：多 (発病株率0.3%)	10月中下旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+) 台風による傷害の発生(+)
	べと病	発生量：多 (発病株率0.2%)	10月中下旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並(+) 降水量：並～多い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率0.1%)	10月中下旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：並～やや少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	ナモグリバエ	発生量：少 (寄生株率0.7%)	10月中下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
イチゴ	うどんこ病	発生量：少 (発病株率3.2%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±)
	炭疽病	発生量：少 (発病株率1.0%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率3.4%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±)
	ハダニ類	発生量：少 (寄生株率15.1%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：少 (寄生株率0.5%)	10月中旬発生量：少(-) フェロントラップ誘殺数：並～少(±) 気象予報：気温：並(±)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病 すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 15.7%)	10月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(－) 降水量：並～多い(+)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率 3.4%) コナジラミ類発生量：並 (寄生株率 5.5%)	10月中旬発生量 黄化葉巻病：少(－) コナジラミ類：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：少 (寄生株率 0.4%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(－) フェロモントラップ誘殺数：並～やや少(－) 気象予報：気温：並(±)
	ハモグリバエ類	発生量：並 (寄生株率 3.0%)	10月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±)
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：並 ただし、中部地域は多 (寄生葉率 2.1%)	10月中旬発生量：並(±) ただし、中部地域は多 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)
キク (露地)	黒斑病、褐斑病	発生量：並	10月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(－) 降水量：並～多い(+)
作物全般	オオタバコガ	発生量：やや少	9月の成虫誘殺数：並～やや少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(－)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【ネギ（シロネギ）】

＜生育の概況＞

台風襲来による倒伏と生育の遅延が懸念される。

●さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病株率0.02%）。本病は、例年11月以降発生が増加する（11月の年平均発病株率1.0%）。
- ・本病は多湿を好み、発病適温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～多いため、発病が助長される。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・発病がみられたほ場では早期に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深くに埋めるなどして適切に処分する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、上位3葉の平均発病株率は7.40%（平年5.6%）と平年よりやや多かった。
- ・さらに、10月中～下旬にかけて降雨が多く台風も襲来しているので、調査時点よりも発病が増加していると推測される。
- ・黒斑病は多湿を好み、分生子の発芽適温は24～27℃である。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～多いため、発病が助長される。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・曇雨天が続く場合には発病する前に予防散布を実施する。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.4%（平年2.3%）と、平年に比べ発生は少なかった。
- ・10月の予察灯とフェロモントラップによる農林技術研究所内での成虫誘殺数は平年並だった。
- ・1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年11月には発生が減少する。卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）や若齢幼虫を見つけた場合は、早急に除去する。被害が続くようであれば、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.0%（平成49.8%）と、平年に比べ発生は少なかった。しかし、被害度は25.4（平成30.0）とほぼ平成並だった。
- ・1か月予報では、気温は平成並で、降水量は平成並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・多発生場では、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均被害株率は38.2%（平成30.9%）と、平年に比べやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平成並で、降水量は平成並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、気温の低下に伴って11月には発生が減少するが、多発生場では複数回にわたり薬剤防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

多雨と日照不足により、定植の遅れや生育遅延が認められる。

●黒腐病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平成平均発病株率0.5%）。
- ・1か月予報では、気温は平成並みであるが、降水量は平成並～多いため発生が助長される。

防除対策

- ・本病は細菌病で、発病後防除を実施しても進展が止まりにくいことから、予防散布に努める。特に強風雨の前後に薬剤散布を実施すると防除効果が高い。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外で土中深くに埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平成発生なし）。本病は例年生育後半に被害が増加する（12月の平成発病株率0.1%）。
- ・本病は、降雨があり、20℃前後の気温が続くと発生しやすい。1か月予報では、気温は平成並であるが、降水量は平成並～多いため、本病の発生はやや助長される。

防除対策

- ・例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深く（地下50cm以上）に埋める等して適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率0.1%）。
- ・10月の農林技術研究所内および県内各産地のフェロモントラップによる成虫誘殺数は平年並～やや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・結球前の新芽が加害されると芯止まりや品質の低下を招くので、結球前に防除を行う。
- ・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系およびジアミド系殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるため薬剤の選定には十分注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率0.5%）。但し、防除員からは、平年に比べやや多い報告があった。
- ・フェロモントラップによる成虫誘殺数は平年並～やや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率0.6%）。
- ・その他、【作物全般】のオオタバコガの項を参照。

防除対策

- ・幼虫が結球部を加害するため、結球内に侵入後では薬剤の効果が上がりにくい。例年、発生が見られるほ場では、早めに定期的な防除を行なう。
- ・薬剤に対する抵抗性の発達を防ぐために、同一系統の薬剤を連用しないようにする。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率1.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本虫は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早期に薬剤防除を実施する。
- ・下葉の葉裏に寄生が多いので、寄生部位に薬液が届くようにていねいに散布する。

【ダイコン】

＜生育の概況＞

生育は平年並～やや早い状況である。長雨と台風による影響が懸念される。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（降雨は本病の発生を助長する。例年、生育後半になると発生が増加する。）。
- ・台風により生じた傷口から病原細菌が感染し、発生が増大する可能性がある。

防除対策

- ・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。
- ・葉柄基部から侵入した場合は、根部に影響を与え商品価値を落とすこともあるため特に注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病は分生子の発芽最適温度が10℃と比較的低温を好む。また多雨で発生が増加する。）。

防除対策

- ・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがある。ワッカ症を防ぐには、葉での発病が少ないうちに薬剤散布を行うことが必要である。
- ・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年0.1%）。
- ・本病の媒介虫であるアブラムシ類も、発生は確認されなかった（平年0.2%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、アブラムシ類の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・浜松市および牧之原市のフェロモントラップによる誘殺数は、平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は9.3%（平年8.3%）と平年並の発生であった。ただし、西部地域では発生が多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

長雨の影響により定植が遅れているほ場が多い。また、台風21号による葉の傷害が多く発生している。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（降雨は本病の発生を助長する。例年、生育後半になると発生が増加する。）。
- ・台風により生じた傷口から病原細菌が感染し、発生が増大する可能性が高い。

防除対策

- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に速やかに防除を行う。
- ・本病は主に結球期以降に発生するが、結球前も葉面の病原細菌数を減らしておく必要があるため、結球期に入る前に薬剤の予防散布をすることが大切である。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。

●べと病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（多湿は本病の発生を助長する。また、病原菌の生育適温は10～15℃で比較的低温を好む。）。

防除対策

- ・予防散布に努める。初発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年並～やや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。なお、育苗期後半または定植時に薬剤処理した場合でも、定植1か月以降に幼虫が発生する場合もある。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.7%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・常発地では育苗期後半または定植時に薬剤処理を行う。
- ・葉に白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【イチゴ】

<生育の概況>

生育は、出蕾～開花初期で平年並である。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.4%（平年1.3%）と平年に比べ発生が少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・育苗期に発生がみられたほ場では今後の発生に注意し、発病が少しでもみられた場合は早急に防除する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.1%）と平年に比べ発生が少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・本病は高温多湿条件で多発する。ビニール被覆後はハウス内の温度が上昇し、発病を助長するので、ハウス内温度の過度な上昇をさける。
- ・開花・結実による株への負担がかかると発病するため、発病を認めた場合は、直ちに発病株を抜き取り、ビニール袋に入れ処分する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.9%（平年2.9%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並で本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ビニール被覆後は、増殖に好適な条件となるので、発生に注意し初期防除に努める。
- ・天敵を利用する場合は、寄生されたアブラムシ（マミー）の発生状況をよく観察する。薬剤散布をする時は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.3%（平年10.7%）で平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並みで本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・近年多発生が続いており、寄生が認められた場合は少発生のうち防除を徹底する。
- ・天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察し、発生が多い場合には、天敵放飼前にハダニ類の密度を下げる。ハダニ類が増えた時は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年0.9%）で平年より少ない発生であった。フェロモントラップによる誘殺数は、平年並～やや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並みで本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・11月は野外の気温が下がり、外からの侵入は10月に比べ少なくなるが、11月中はまだ侵入が見られる。発生初期の若齢幼虫期に防除を徹底する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い状況である。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.1%（平年15.2%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好む）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに除去し、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では、定植後から11月頃まではすすかび病が多く、次第に葉かび病が優占する傾向が見られる。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.4%（平年2.8%）と平年より少なかった。ただし、病害虫防除員からは発生がやや多いとの回答があった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は、7.0%（平年6.3%）と平年並であった。ただし、病害虫防除員からは発生がやや多いとの回答があった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるため、本病の媒介虫であるタバココナジラミの発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。
施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.7%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年並～やや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.1%（平年2.6%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・葉表の白点（産卵痕）や初期の食害痕に注意し、発生初期に薬剤防除を実施する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は4.4%（平年1.8%）と平年より多かった。ただし、地域別で見ると東部地域0.1%（1.0%）、中部地域10.9%（2.2%）、西部地域2.2%（2.7%）で、中部地域が多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。

防除対策

- ・発生がみられる場合には、収穫前日数に注意して防除を行う。

<その他の病害虫>

●青かび・緑かび病

- ・10月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.03個/樹（平年0.1個/樹）と平年より少なく、落果発病果数も0.3個/樹（平年0.4個/樹）と平年より少なかった。
- ・本病は果実の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように注意して収穫する。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意し防除を行う。
- ・台風により生じた傷口から病原細菌が感染し、樹上での発病が増加する可能性がある。

●褐色腐敗病

- ・10月中旬の巡回調査では、樹上発病果および落果発病果は確認されなかった。
- ・本病原菌は土壌中に生息しており、台風による泥はね等により、樹上での発病が増加する可能性がある。

【カンキツ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・10月中旬の中晩柑の巡回調査では、果実の平均発病度は0.3（平年0.6）と平年より少ない発生だった。病害虫防除員からの報告によると、県内全域でかいよう病は平年並～少ない発生である。
- ・感染は11月以降起こらないが、冬期中に夏秋梢の剪除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

【キク(露地)】

＜生育の概況＞

生育は平年並である。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は6.7%（平年11.2%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃と比較的高温を好む）。

防除対策

- ・発病株は次年度の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

【チャ】

＜その他の病害虫＞

●ナガチャコガネ

- ・幼虫は10月下旬～11月下旬にかけて、地表近くに上がってくる。うね間から雨落ち部を掘取り、幼虫が地表から20cmまでの深さに見られたら、薬剤の土壌かん注を実施する。

●チャトゲコナジラミ

- ・本種の発生は県内の多くの茶園に広がっており、巡回調査茶園すべてで幼虫の寄生が確認された。また一部にはすす病の発生が見られるような多発生茶園もあった。
- ・発生が確認されている茶園では、秋冬期に越冬幼虫を防除すると、来年の一番茶時期の成虫発生を少なくすることができる。
- ・防除は、チャトゲコナジラミに登録のあるマシン油乳剤を用いて来年1～2月に2回行うと効果的であるが、赤焼病の発生が懸念されるほ場では、年内に1回のみ防除を行う。その際、赤焼病の防除薬剤を先に散布し、1週間程度のちにマシン油乳剤を散布する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

●赤焼病

- ・本病は、通常春先より発生が始まり夏前に収束するが、台風が襲来した場合は、夏・秋でも通過1週間～10日後から発病し、翌春の伝染源となることがある。このため、台風襲来時は、通過後2週間目くらいまで数回は茶園を観察し、発生が見られた場合は殺菌剤を散布することで病原菌密度を下げておく。特に、「つゆひかり」「おくひかり」は本病に感受性が高い（＝本病に弱い）ので注意する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの誘殺数は平年並～やや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、オオタバコガの増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。
- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

<その他の病害虫>

●菌核病

- ・本病は降雨があり、20℃前後の気温が続くと発生しやすい。長雨と台風の襲来により、発生に好適な条件が続いているため、発生に注意が必要である。例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深く（地下50cm以上）に埋める等して適切に処分する。

3 季節予報

(1) 1 か月予報 (東海地方 平成 29 年 10 月 26 日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 10 月 28 日から 11 月 27 日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう 1 か月の平均気温は、平年並の確率 50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに 40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに 40%です。週別の気温は、1 週目は、平年並または低い確率ともに 40%です。2 週目は、平年並の確率 50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1 か月	気温	30	50	20
1 か月	降水量	20	40	40
1 か月	日照時間	20	40	40
1 週目	気温	40	40	20
2 週目	気温	30	50	20
3～4 週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

- 1 か月 : 10 月 28 日 (土) ～ 11 月 27 日 (月)
- 1 週目 : 10 月 28 日 (土) ～ 11 月 3 日 (金)
- 2 週目 : 11 月 4 日 (土) ～ 11 月 10 日 (金)
- 3～4 週目 : 11 月 11 日 (土) ～ 11 月 24 日 (金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成29年10月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 11月から1月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

11月 平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

12月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

1月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

【気温】

3か月			11月			12月			1月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
30	40	30	30	30	40	30	40	30	30	40	30

【降水量】

3か月			11月			12月			1月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	30	30	40	40	20	30	40	30	40	30	30

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	11月	12月	1月	11月	12月	1月
浜松	13.5	8.4	5.9	119	52	57
静岡	13.9	9.0	6.7	132	63	75
三島	12.8	7.9	5.7	107	55	74

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--